都私幼連だより
こどもがまん育が PROJECT
6
2016 ／ June
Kindergarten Information Development Society
東京都私立幼稚園連合会
編集発行人　友松浩志　〒102－0073　東京都千代田区九段北4－2－25　私学会館　TEL03(3262)3666・FAX03(3264)6195

幼稚園教育要領改訂の動向

都私幼連副会長　加藤 篤彦（武蔵野東第二幼稚園）



「幼稚園教育要領」は幼児教育の重要性に対する認識が深まっている中で平成30年改訂に向けて、中央教育審議会幼児教育部会にて検討が進んでいます。第7回部会（4月25日）までの進捗状況から、その動向をお伝えします。

幼児期の発達特性に応じた「環境を通して行う教育」「遊びを通しての総合的な指導」あるいは「領域」という捉え方は改訂においても尊重され、小学校教育の前倒しではないことも前提で検討が進められています。一方で、これからの国の教育として幼児教育、小学校・中学校教育、そして高等教育へと全体を貫いて目指す姿を、①「社会に開かれた教育課程」の実現②育成すべき資質・能力の明確化とそれを踏まえた教育課程の構造化③アクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導の不断の改善④学習評価の改善の4点にまとめ全体の改訂の方向性として示しています。

ですから、教育要領改訂作業も、この流れに沿って進められています。以下、いくつかのキーワードからまとめます。

資質・能力の3つの柱

18歳の段階で身につけておくべき資質と能力を

①個別の知識や技能（何を知っているか。何ができるか）

②思考力・判断力・表現力等（知っていること・できることをどう使うか）

③学びに向かう力、人間性等、情意、態度等に関わるもの（どのように社会・世界と関わりよりよい人生を送るか）

の三つの柱から整理しています。

幼児教育においても、育みたい「資質・能力の3つの柱」という観点から「遊びを通した総合的な指導」を通して育成される内容について検討されています。

見方や考え方

資質・能力の育成と同時に「見方や考え方」を育み総合・統合していく学びを目指しています。幼児期における「見方や考え方」は、教科的な視点ではなく、生活全体をどのように捉えるか から始まり、幼稚園における様々な体験を通して培われていくものとして、小学校教育につながる基礎として整理しています。

アクティブ・ラーニング「深い学び」「対話的な学び」「主体的な学び」

資質・能力を育む学習過程の在り方として、「習得・活用・探求」の重要性が示されています。部会では5歳後半の姿を例として、遊びの中にある学びの過程をあげて、遊びの「創出」↓「没頭」↓「振り返り」という流れの中で、アクティブ・ラーニングの3つの視点から、学習プロセスを整理しています

年長の後期に現れてくる幼児の具体的な姿の明確化

「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」（平成22年）をもとにして、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を再整理し具体化しています。幼児教育の特質から、育ちの姿を個別に取り出し、目標として身に付けさせるものではないことを前提にしつつ、指導の手がかりや評価の手立て、あるいは幼小の教師間で5歳後半の育ちの姿を共有することで、接続の強化を意図しています。これは新たに教育要領に位置付けられます。

この他、預かり保育の計画について、特別支援教育の充実について、教材の充実についてなどなど、改訂は多岐にわたります。また機会を得てお伝えしたいと思います。



幼稚園フェア

平成28年4月24日
アルカディア市ヶ谷

4月24日（日）、アルカディア市ヶ谷（私学会館）にて、幼稚園フェアが行われました。

これは、関東近郊の大学、短大、専修各種学校などの養成校の学生を対象とした、東京都の私立幼稚園の就職説明会です。今年は78園の幼稚園がブースを出展し、幼稚園への就職を考えている学生に私立幼稚園で働くことの魅力をアピールしました。

今回は、昨年の７７０名から24％増の９６０名の学生が参加し、会場は熱気に満ちていました。各ブースともに多くの学生が並び、真剣に話を聞き、また意欲的に質問していました。

昨年以前も出展していた幼稚園の関係者に聞いてみると、このイベントで出会った学生が就職試験を受けに来ることがけっこうあるらしく、学生にとってもその幼稚園を身近に感じる良い機会になっていることが窺えました。保育関係の人材確保が困難な時代ですから、このような機会は逃してはいけないと思いました。

しかし、残念なことに現在の参加数は連合会加盟園の1割にもなりません。１０００人近い学生が来ているのですから、もっと参加園数を増やし、学生の期待に応えたいですね。それが私立幼稚園の将来にも必ずつながると思います。









広報委員・菅原　創
（江戸川双葉幼稚園・江戸川区）

















推薦／全日本私立幼稚園連合会
編集／公益社団法人東京都私立幼稚園教育研修会

2016 たのしい なつ

定価
各370円
（税込）

本誌／A4判変型20ページ

お申し込みは
研修会
事務局へ！

「なつのわくわくカレンダー」（三誌共通）

大好評！
別冊付録



カレンダー／B4判変型16ページ、
カラーシール綴じ込み



「おてんきシール」と
毎日の生活習慣をチェックできる
「健康観察シール」
付き！







第1回「新規採用教員研修会」開催！

平成28年5月11日／飯田橋レインボービル





関　政子
都私幼連
教研委員長



加藤篤彦
都私幼研
常務理事



加藤 仁
東京都生活文化局
私学部長

（公社）東京都私立幼稚園教育研修会（友松浩志理事長）は5月11日、飯田橋レインボービルにおいて標記研修会を開催しました。例年、参加者の多い研修会ですが、今回はパーテーションを取り除き廊下に椅子を並べるほどの盛況でした。

開会に当たり、東京都生活文化局の加藤 仁 私学部長からご挨拶を頂いた後、3人の先生の講話・講演がありました。

幼稚園教諭という仕事

（公社）都私幼研理事長
友松 浩志 先生



「本分（ほんぶん）」＝その人の尽くすべき義務、という言葉を紹介され、「幼稚園教諭の本分」についてお話しくださいました。

まず、親の一番の財産である子どもを預かっているので、安全を守ること。次に、子どもを理解するため、一人ひとりに同調し（合わせ）、子どもの心の声を聞けるようになること。三つめに、より人間としての可能性が広がるように、「こういう子どもに育ってほしい」という願いに子どもを導くこと、とのことでした。

自分のやりたい仕事につけた幸せを感じながら精いっぱい保育に尽くし、子どもたちを照らす光のような保育者になってほしい、と励ましの言葉をいただきました。







子どもとの生活と安全

多摩みゆき幼稚園
関岡 貴之 先生



子どもが園生活を安全に送るために気をつけるべきことについてお話くださいました。

保育中や送迎などあらゆる場面での危険を想定し、万一の場合でも子どもの安全を守るため、適切な対応を取れるように備えることが大切であり、そのためには避難訓練の実施や、AED、防災用品、不審者対応など各園の対策を確認しておくこと、また、職員間の情報共有や、子どもの自己防衛力を育てることも必要であるとのことでした。

子どもの要求をしっかり聞くことで子どもの気持ちが満たされ、おとなの希望も伝わるので、子どもと気持ちが通じる関係作りを大切にし、自分を信じ、人を信頼できる子どもを育ててほしい、と話を結ばれました。

教員としての身だしなみ、心がけ

帝釈天附属ルンビニー幼稚園
早崎 淳子 先生



早崎先生ご自身が僧侶でもあり、保育との共通点は目に見えないことに対して対価をいただいていることです、と話を始められました。

目に見える身なりを整えることや、立場をわきまえた思いやりのある態度、心を込めた対応は目に見えないものへの誠意を

表すことであり、対応する相手に安心してもらえるための配慮であるとのことでした。

自ら何かをやっていくことが保育者としての大切な心がけであり、子どもの変化に気づく感性を磨き、子どもの心に寄り添い、共感できる保育者になって、長く園に勤めてください、とお話くださいました。

これからも、ともに保育を語り合い、研鑽していきましょう、と話を締めくくられました。

広報委員・久米淑子
（ひこばえ幼稚園・杉並区）

平成28年「総会」（決算）開催

第48回東京都私立幼稚園連合会／第86回(公社)東京都私立幼稚園教育研修会
平成28年5月23日／私学会館

都私幼連

先に都私幼連は私学会館において決算総会を中田総務委員長の司会により開催した。

第1号議案「平成27年度事業報告」の上程にあたって友松会長より包括的な説明があった後、常置委員会及び特別委員会、設置者別協議会、地区長会から各事業報告の説明後、第2号議案「平成27年度収支決算」について髙畑事務局長より説明の後、「監査報告」を安蔵監事より行い、1号2号議案一括審議となり、その後採決に移り、異議なく承認された。

（公社）都私幼研

引き続き、（公社）東京都私立幼稚園教育研修会総会が行われた。

友松理事長より挨拶の後、会則に基づいて友松理事長が議長に就任し、第1号議案「平成27年度事業報告」については加藤常務理事より説明があった。第2号議案「平成27年度収支決算」については加藤常務理事より指名された髙畑事務局長より説明後「監査報告」を山口監事より行い、1号2号議案一括審議となり、その後採決に移り、異議なく承認された。第3号議案「理事及び監事の選任」については資料記載のとおり異議なく承認された。

広報委員長・田澤　茂
（東一の江幼稚園・江戸川区）

平成28・29年度
理事・理事長・常任理事・監事

理事長	加藤篤彦	武蔵野東第二
常務理事	関　政子	やはた
理事	友松浩志	神田寺
理事	中田徳彦	府中天神町
理事	永田陽子	大和郷
理事	當麻悦子	仰願寺
理事	塩野　治	ねむのき
理事	木崎曜子	武蔵野相愛
理事	関岡貴之	多摩みゆき
理事	月本喜久	都私幼P連会長
理事	上園佳與子	東京女子学院幼稚園講師
理事	浅見　均	青山学院女子短期大学教授
理事	花輪　充	東京家政大学教授
理事	請川滋大	日本女子大学教授
理事	松村和子	文京学院大学副学長
監事	山口善久	公認会計士
監事	角本史夫	白鳩





提言 Proposition



ＮＰＯ法人 日本冒険遊び場づくり協会 事務統括理事 ／ ＮＰＯ法人 園庭・園外での野育を推進する会 理事長

天野秀昭（あまの ひであき）**先生**

1958年、東京生まれ。1980年、日本初の官民協働による冒険あそび場『羽根木プレーパーク』のプレーリーダーとなる。その後、地域住民と共に世田谷・駒沢・烏山の３プレーパークの開設に携わる。1998年には国内初の子ども専用電話（18歳まで）『せたがやチャイルドライン』の開設にもあたる。また、2014年には幼稚園・保育所の園庭を魅力的な遊び場にとの願いで、新たなＮＰＯ法人を設立し、理事長として新しい挑戦を始める。全国に冒険遊び場を広めるためのＮＰＯ法人日本冒険遊び場づくり協会で、2016年４月から事務統括理事に着任。2009年４月から16年３月まで大正大学特命教授として教鞭をとっていた。主な著書に『よみがえる輝く子どもの笑顔』（すばる舎）『遊びが社会を変える』日本冒険あそび場づくり協会編、ほか多数。

子どもは限界に挑戦して、自分自身を育てる！

今回はプレーパークにある廃材で出来た小屋や、木の枝に渡したロープなどで飛んだり跳ねたり登ったりして楽しそうに遊ぶ子どもたちの姿を間近で眺め、怪我しないかとハラハラしながら天野先生のお話を伺いました。

チャレンジ精神は「生きる意欲」

――うわ～っ！あの子、あの高くて狭いところを次々と飛び移っています。あ、こっちの子はきれいな姿勢で飛びおりましたね。あの高さだと２メートルはあるのでは？　子どもとは思えないですね。怪我などしないのでしょうか？

天野　絶対にしないとは言いきれませんが、命が脅かされる、将来に残ってしまうような大きな怪我など、断じてあってはなりません。その辺りの配慮・目配りは十分にしています。

　このプレーパークは日本で初めてということもあって・隣接する神奈川・千葉・埼玉はじめ関東全域からの来園を含めると今でも年間で12万人ほどになります。その内、ここで病院に連れていくような怪我人は多くても年間10件程度です。但し、大きな怪我はありません。

――それにしても、子どもってすごいですねぇ～。

天野　あの子たちにとってはすべてが初体験で、自分自身の限界に向かって挑戦しているということです。自分自身への挑戦、それが彼らの育ちなのですよ。自分の世界を広げていく、自分の世界を深めていく。そうしながら自分の世界を作り上げていくのです。つまり、子どもにとってチャレンジ精神は育ちたいという現れであり、『生きる意欲』なのです。ですから、「危ないから止めなさい」ということは、基本的に育ちの意欲を削ぐことにつながってしまいます。

　常に自分の限界に挑戦している子は、自分の限界がどこにあるかってことを知っています。そうすると、他の子どもが出来たとしても今の自分には無理だという判断ができます。これ以上やると危ないぞと直感できるわけですね。危機察知能力というか、自己防衛能力とでも言いますか。私たちはこれを「危険察知能力」と言っています。

　こうした遊びを通して彼らは自分を守る力、『本能的・直観的』な能力を育てていくのです。

　よく安全・安心と二つ並べて言いますが、安全と安心は全く別のもの。安全であっても安心とは限りません。ある調査によれば、このプレーパークは他の公園等に比べて格段に安心感が高いという結果が出ました。それは、子どもにとって受け入れられているという『安心感』なのです。自分たちがやろうと思うことを応援してくれる、それが高い安心感になって思いっきり遊べる…。幼稚園や保育所の園庭も、こうあって欲しいなと思います。

園庭は子どもが育つ最良の場所

――私もそう思います。ところで、先生がこのお仕事に携わるようになられたきっかけについてお聞かせください。

天野　私は、美術短大時代に造形教育のサークルで子どもたちと出会い、子どもの育ちに興味を持ちました。その後、自閉症児との出会いがきっかけで「遊びの世界」の奥の深さを実感したのです。そうこうするうちに、日本で初めて官民協働による冒険遊び場『羽根木プレーパーク』が開設し、１年間ほど派遣ボランティアとして活動しました。翌年、１９８１年ですが、住民運動によってプレーパークで最初の有給プレーリーダーになりました。以来、子どもの遊びの世界が持つ力のあまりの大きさに魅せられて、活動を続けてきたということです。

　この活動を続けてきて思うことはいろいろありますが、幼稚園も保育所も園庭は『子どもの育ちの場』であるということを、強く実感しています。幼稚園は、保育所もそうですが、小学校との連携ということで、就学のための準備期間のように言う声も



聞こえてきます。とんでもないことです。幼児期の遊びは、そんな近い将来のためにあるわけではありません。生涯元気で生き抜いていく力、体力も含めて幼稚園や保育所の園庭は『生きる力』の根本を培うための遊び場なのです。

「悪（AKU）」の禁止が子どもをダメにする

――天野先生の書かれたご本には、「危ない、汚い、うるさい」という大人たちの言葉について触れておられますね。

天野　「危ないからやってはダメ」「汚いから止めなさい」「うるさいから静かにしなさい」これ、大人の口癖ですよね、躾の呪文のように（笑）。頭文字を綴って、『悪（A・K・U）』と私は言っています（笑）。

しかし、この三つは子どもたちの育ちには不可欠のもの。それを止めさせれば、子どもは育ちようがない。

ここへ連れてくる親御さんたちには分かっていても、社会全体としては子どもたちの『AKU』に対して注意しないと「何だ、あの親は！」といった風潮がありますから、難しいところではありますけど。

――先生のお子さんも幼稚園や保育所には行かず、プレーパークで育ったとお聞きしています。

天野　そうです。世田谷区内で3番目にできた、駒沢はらっぱプレーパークというところです。そこで、親同志が預け合う保育グループを作って地域の子どもとともに育ててきました。

昔は、自分で遊び育つ、つまり「遊育」ですね。それができる場所がたくさんあって、「悪さ」も含めて自分自身の世界を育てることができました。今は大人が子どもたちへ教育一辺倒ですから、子どもたちは完全に大人たちに乗っ取られたまんま。だから、自分の世界が作れない。

教育と遊育は相反しているのではなく、教育をする大人が遊育の価値をしっかりと受け止める場所を作ることが必要です。その大切さを分かって欲しいと思いますね。

――私の子ども時代には「ガキ大将」がいました。親の言うことは聞かなくても、ガキ大将の言うことは聞く。そうでないと遊べませんでした。

天野　昔は、子ども社会でしたからね。ガキ大将のタイプによってそのグループの遊びも違っていましたし、結構、大人の目をかすめたところで子ども同志で育ち合っていったものです。

――ここにはベーゴマもありますね。5寸釘で陣取りゲームもできる、そんな素朴さが懐かしい昔を思い出させてくれます。

天野　昔と今では子どもの置かれる環境は全然違ってきています。もっとも違うのは、大人と子どもの人数関係です。少子化とは、子どもから見たら多大化です。つまり、大人がやたらに多い。子どもはもう、大人の目をかすめて遊ぶことができなくなっています。その大人たちがこぞって子どもを大人の思うがいい子にしようと教育したら、子どもは自分の世界を育てる機会を持つことが全くできません。

大人のコントロールばかり受けていると、子どもたちは生きているという感覚から遠ざかってしまいます。繰り返しますが、その最大の理由は、遊んでいないから自分の世界が構築できないのです。こうした現状からこれからの大人と子どもの関係性を考えると、その子の「遊育」をどれだけ生かせるかを最優先できる大人の姿勢が求められるのだと思います。

――あの子は、さっきからずっと水を出して遊んでいますね。私も記憶があります。

天野　そうでしょ。そういう記憶は生涯の記憶として残りますからね。アイデンティティーというものです。アイデンティティーの正体は記憶ですからね。体験した記憶が自分の中にバームクーヘンの層のように、蓄積しているのです。記憶は自分（私）そのものなんですね。

長期記憶というメカニズムが最近分かってきました。遠い昔に味わった喜怒哀楽の情動を伴ったエピソードが自分の中で積み上げられて残っていて、思い出すわけです。

『AKU』の禁止の弊害を保護者の方に伝えてください。幼稚園の園庭は子どもが育つ「最高の遊び場」にしてあげてください。私の心からの願いです。

――ありがうございました。

★インタビュー＝広報専門委員・浅井正信（東江幼稚園・葛飾区）



都私幼連の動き

【5月】

5／9　経営研究委員会
　　幼稚園教育研究会
5／10　常任理事会
　　理事会
　　（公社）理事会
5／11　新規採用教員研修会
　　（飯田橋レインボービル）
5／16　認定こども園委員会
　　幼稚園教育研究会
5／17　Ｐ連 監査会
5／20　教育研究委員会小委員会
5／23　連合会 総会
　　（公社）総会
　　（公社）理事会
5／24　広報委員会
5／26　教育研究委員会 (グランドヒル市ヶ谷)
5／27　①ＰＴＡ教養講座
5／30　振興対策委員会

【今月】

6／3　経営研究小委員会
　　①経営研修会
6／7　Ｐ連役員会
6／8　地区長会
6／13　宗教法人立園研修会（円光院幼稚園）
6／16　Ｐ連委員総会
　　Ｐ連新旧役員会
6／17　幼稚園教育研究会
6／21　経営研究委員会
6／27　総務委員会
6／28　認定こども園研修会
　　①園長・主幹研修会
6／29　②新規採用教員研修会
6／30　①養成校交流会
　　広報委員会

子育て支援を考える

狭山ヶ丘幼稚園（東大和市）
園 長　網干 裕之

施設型給付、子ども子育て会議など、色々な試みがここ何年かで始まった。幼稚園・保育園の状況は目まぐるしく変わっている。

私も西東京市と東大和市の子ども子育て会議に出ているが、どうしても子育て支援でなく就労支援の感がぬぐえない。本来は「子どもを増やす」「子育てに関われるように」、それには女性が自分らしく、自分で生き方を選べることが必要だと私は思う。

働いている女性も増えたが、家計の上で仕方なく働いている人も多い。専業主婦になりたいと思っている人も増えていると聞く。子どもの小さいうちは子育てに専念したい人もいる。西東京市の幼稚園でもアンケートの結果でも出ている。

また、共働きをするなら、子どもの小さいうちは、二人ともフルタイムで働いて、帰宅して、家事・育児をするには体力も精神的にも難しい。やはり子育てをするためには、短時間労働や行事に参加するために休みを取れることも大事である。

そのためには、収入の極端に少ない人や、一人で子育てしている人は福祉として支援が必要だが、それ以外の人は、働いている人・働いていない人に関わらず、幼稚園・保育園に関わらず、子育て一人あたりの給付を考えることと、短時間労働で収入が少し減っても、子育てしながら働ける環境の整備が必要と感じる。

保育園を増やして、預かる時間を増やすのでなく、子育てをしながら働ける環境の整備や子育てに関わりたいと思う環境の整備、自分の意志で子育てに専念したり、子育てに重きを置く生活をしても同等に支援してもらえる国になることを願っている。



編集後記

◆新年度が始まってから2ヶ月が経ち、園生活もようやく軌道に乗りつつあるのではないだろうか。震災に見舞われた熊本でも、小学校などが徐々に再開し始めたようだが、日常の生活を取り戻すためにはまだまだ多くの時間と費用を要することだろう◆近年では、首都直下型地震や東南海地震の被害想定により、震災については「対岸の火事」ではなく、「いざ」という時の備えと対応の必要性を強く感じていることと思う。我が園でも、子どもたちの月1回の訓練とは別に、毎年4月と10月に保護者にも訓練に参加いただいている。毎年、参加の意識には温度差があることが否めないが、今年は熊本地震の直後ということもあり、よりリアルにシミュレーションしていただけたことと思う◆「自分の身の回りには被害が及ばないだろう」と漠然と考える方も少なくないと思うが、これは人間であれば誰もが持っている心理だそうだ。そんな気持ちを改める機会として訓練に臨んでいただきたいものだ。

（金 子）